



〒514-0003

津市桜橋 2 丁目 142

三重県公立小中学校教頭会

教育文化会館別館 3 階

TEL 059(228)2340

FAX 059(228)2271

E-mail : mieheadt@hyper.ocn.ne.jp



1 年を振り返って

三重県公立小中学校教頭会会長

中 野 仁 之

暦の上では春とは言え、まだまだ寒さ厳しい 2 月初旬、業間の校庭では「教頭先生、見とって！」と、なわとびに励む小学生に、子どもの素直さと愛らしさを感じます。三重県公立小中学校教頭会会長に就任し、早や 1 年が経とうとしています。この間、私を含め 8 名の役員が何とかやって来られましたのも、ひとえに会員の皆様のご理解ご支援のおかげと心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

特に、11月28日（土）御浜町で開催しました県教頭会研究大会が無事成功裏に終えることができましたことは、皆様のご協力のおかげであり、大変ありがたくうれしく思いました。各地域・各校の実践を持ち寄り、研究討議の柱に沿っての話し合いは、教頭としての教養と専門性を研ぎ、力量を高める大切な機会となりました。また、静岡県浜松市で開催された全国研究大会でも同様に感じたことですが、グループ討議の場で初めて会う教頭同士が、日頃の思いや悩みを語り合うことで、まるで旧知の友のように打ち解けることができたことは、大きな喜びでした。さらに、大会開催にご尽力いただきました紀南教頭会の皆様に改めて感謝いたします。大変なご苦勞をおかけしましたが、「三重の教頭のもとまりと力強さ」を示していただきました。

この 1 年間、県教頭会会長として、全国教頭会、県教育委員会、県校長会等、たくさんの教

育に携わる方々と接する機会をいただきました。その中で感じたことは、「わたしたち教頭は、みなさんから大切に思われ、同時に大きな期待を寄せられている」ということでした。教頭はあくまで「校長の補佐」であり、その権限はさほど大きいものではありません。にもかかわらず「大事にされ、期待されている」のは、学校現場を知るみなさんが「教頭が学校の中で一番大変な仕事をしている」と思っていたか、
「教頭は学校の要、学校のかじ取り役」と学校を動かす重要な存在として捉えていただいているからだと感じました。このことは、県内の教頭先生方がその職責を全うしようと日々努力されている賜物であり、先人が築き上げてくれた教頭職に対する厚い信頼感からであると思います。

わたしたち教頭は、未来を見据え、山積する教育課題に真摯に向き合わなければなりません。自他共に認める大変な仕事です。全国教頭会研究大会で助言の先生が仰っていただいた言葉を、改めて皆様に伝えます。「守備範囲が広く、感受性が強く、進化する、明るく、健康な教頭先生であってください。」

1 年間の感謝とともに、皆様方のご健康とますますのご活躍を祈念して、挨拶とさせていただきます。

第37回

三重県公立小中学校教頭会研究大会 (紀南大会)

■第1—①分科会

「土曜授業の取り組みに教頭としてどのようにかわるか」に参加して

津市立芸濃小学校 藤 並 みどり

11月28日、御浜町で開催された「第37回三重県公立小中学校教頭研究大会」に参加させていただきました。まっすぐに続く海岸線の向こうには太陽の光がきらきら輝く南紀の海が迎えてくれる中、初めての三重県教頭会研究大会の会場に到着しました。

「教育課程に関する課題」を研究課題に挙げた第1分科会に参加しました。はじめに、「土曜授業の取組に教頭としてどのようにかわるか」と題して、玉城町立外城田小学校釜石正吉教頭先生より提言がありました。平成26年度より、玉城町では毎月1回（8月を除く）の割合で、度会町では2ヶ月に1回の割合で土曜授業が実施されてきましたが、初年度の課題をふまえて2年目を迎える今年度は、町内小中学校で実施日を統一したり、平日行っていた行事で土曜日に行うことができるものを土曜授業日に実施して平日の授業時間を確保したりする等の取組が報告されました。報告の後、参加者から「1年目は学力向上についての効果の検証が難しかったが、今年度はどのような検証方法をとっているのか」という質問が出ました。それに対して「土曜授業をしたから学力が向上したと明確にすることは難しい。児童生徒にアンケートを実施し、自分にとってプラスになっているかどうかを確認することや、補充授業が中心になっ

ているので各校で分析することなどの検証をしている。しかし、検証についてはこれからの課題である」との回答がありました。

提言を受けて、①「各学校の取組を交流し、教育課程における位置づけ、成果と課題を明らかにし、今後の取組にどう生かしていくか」、②「教頭の職務としてどのように土曜授業にかかわっていくか」の2つを視点としてグループ討議をしました。グループ討議では、市町により土曜授業の実施方法や内容が異なっていることが明らかになり、学力向上につながっているのかを検証する場の必要性、学校評価等により取組を改善すること、過重労働対策など管理職として留意することが必要であることを確認しました。

グループ討議の後、各グループからそれぞれの討議内容の発表を行いました。どのグループからも市町により回数や内容がバラバラであることや、「小中での連絡調整」「教務主任・学年主任との共有」「職員の負担感をなくすなど過重労働対策」といった教頭としてのかかわり方が話し合われていました。

最後に、助言者の御浜町立阿田和小学校 川本校長先生から、教頭会として土曜授業をテーマに話し合いを持った成果と課題についてお話しいただきました。今後の課題として、学力向

上の取組として土曜授業を実施するのであれば
検証の必要がある、県下の取組日数が一定でないのをどうしていくか、管理職として呼びかけるなど勤務の振替をとれるようにしていくこと、
小中一貫校での行事の調整の仕方、土曜日の行

事による保護者・地域住民の参加率向上にどう
取り組んでいくか、ミドルリーダーとの連携と
取組成果の数値化をどのように図っていくか等、
教頭として担っていくことはたくさんあることを
明確にさせていただきました。

■第1-②分科会

「地域の教育力の活用は？」

亀山市立加太小学校 松本英夫

課題「教育課程に関する課題」の分科会に参加した。主題は「地域の教育力の活用を図るために教頭としてどのように取り組むか」で、志摩市立志島小学校の向井先生から提言があった。志島小学校は44人の2個複式で、学校運営を考える中で地域の教育力の活用は欠かせないとのことである。私の勤務校の加太小学校も34人の2個複式であり、山の中の小さな学校である。もちろん地域の教育力の活用は欠かせない。共通点も多く興味深く聞かせていただいた。提言では年間を通じて地域との行事がたくさんあり、その活動を通して、子どもたちは地域が好きになり自分のふるさとに自信を持つ。ほめられることも多くなり、自己肯定感を高めることにつながっているとのことである。連絡調整に時間をかけることで問題を防ぎ、地域の信頼関係を得ることもつながることになる。課題として、休日出勤のため時間外労働が増えることや体験で学習をどう深めるか、前例踏襲などである。

提言を受けて、小グループに分かれて話し合いをもった。私のグループでは、町の中の学校や大きな規模の学校の状況の報告を受けたが、それぞれ地域性が違い地域の教育力といってもさまざまである。学校がほとんど関わらなくても地域が進んでするところもあり、学校が地域の行事にあまり関わらないところもある。しかし、共通するところは行事や授業に地域の方

を招いたりすると、学校から依頼することが多くなる。しかし、無理をお願いすることも多く次第に遠慮がちになり、学校中心ではなく地域中心という流れになってしまうことも多い。あれもこれも様々な行事や取組があるが断れない状況になるということであった。自分の勤務校でも行事が多く体験中心で学習を深めていく点での課題がある。そうならないためには、学校でどんな子どもを育てたいのか、そしてカリキュラムへの位置づけを行い、計画的に取り組んでいることを地域の方に理解してもらわなければならない。教室で体験に関連した座学にじっくり取り組む必要もある。そうすれば地域と連携した活動も継続できるであろうし、そのために教頭として取組ことはたくさんあるとの話になった。地域の方と良好な関係を築くことや打ち合わせをしっかりと行いスムーズに行事が開催されることに努めることなどである。



自分の勤務校でも前例踏襲の課題はある。基本的にはいつも各行事について前例踏襲のことが多い。地域の関係者での実行委員会が開かれても、内容や担当を確認して終わるという様子である。そのため、ひとつのことを変更しようとする、とてもエネルギーが必要である。変更のためには子どもたちや保護者にとってよいところや問題点を、担当の職員が地域の方に根気よく説明することが必要であった。

地域の人たちの思いは、地域の学校の子どもたちのために何かしたい、何か経験させたいと思う方も多い。そのため会議で決まったことが、急に変更になったり、急に追加されることもあったりする。まず、地域の方と連絡を密にして情報を早めに収集するか臨機応変に対応するかをある程度想定しながら、教頭として調整していくことに努めたい。

■第2－①分科会

「中1ギャップ克服に向けての教頭としてのかわり」に参加して

多気郡多気町立佐奈小学校 大西 稔子

11月28日（土）に御浜町立阿田和中学校で行われた研究大会分科会で、第2－①分科会に参加させていただきました。真っ青な海と空のすばらしい眺めに感動しながら、中学校への歩をすすめました。

第2分科会「子どもの発達に関する課題」では、熊野市立新鹿中学校 長嶋一朗教頭より「中1ギャップ克服に向けての教頭としてのかわり～子ども支援ネットワーク構築事業の取組を通して～」と題して提案をいただきました。

熊野市の中学校は、7校のうち極小規模の学校が5校という地域の特徴から人間関係の固定化による学習面・生活指導面の難しさがあるとのことでした。熊野市の小学生が中学校に進学するにあたって、不安に思うこと（中1ギャップ）は主にどんな事なのかを聴き取り等で調べた結果、「上級生との関わり」「同級生との関わり」「学習面への不安」「部活動への不安」などが見えてきたそうです。これらを克服していくために子ども支援ネットワークを構築し、学びの支援を行ったり、小中連携や地域のつながりを強化していったりしながら自尊感情や学習意欲の向上を計ってきた取組を紹介していた

いただきました。

子ども支援のネットワークは、中学校区の各学校保育所・地区代表（区長）・スクールカウンセラー・育成会（PTA）・青少年育成町民会議・市教委・NPOで構成され、連携して取り組んでこられたとのことでした。連携事例としては、中学校区子ども人権フォーラム・校区あいさつ運動（生徒会メンバーによる街頭あいさつ）・地域ふれあい活動（清掃活動）・小学校6年生と中1、2年生の集い・新入生歓迎ウォークラリーなど様々な取組がなされていました。様々な事例を紹介していただき参考になりました。

提案後のグループでの話し合いでは、各校、各地域で小中連携や小中一貫にむけての取組が行われている状況を出し合いました。小中連携の事例として、

- ・授業を公開し合い合同で研修会を行う。
- ・夏休みに補習授業に出向く
- ・学校の決まりを統一したものにする
- ・人権教育や特別支援教育において連携をはかる 等々。

また、その連携を図っていく際の教頭の役割としては、「人間関係をつくる」「地域で核にな

る人を見つける」「ミドルリーダーを育てる」「組織化をすすめる」等があるということが話し合われました。

特に興味深かったのは、「小中連携の中で学力向上を考える」という話題でした。中3の出口を意識し、9年間を見通して子どもたちの学力の状況を見直し、小中それぞれで学習内容や指導（授業）の仕方を考えていくというもので

した。

分科会に参加して、私たちは常に視野を広く、また遠くを意識し取り組むことの大切さを改めて感じました。県下各地の教頭先生方と話し合い、刺激をいただき気持ちを新たに出来た貴重な一日となりました。今大会開催にあたり、ご尽力いただきました役員・地元実行委員の皆様どうもありがとうございました。

■第2－②分科会

課題を持つ子どもへの支援 ～支援の必要な児童・生徒への望ましい組織的な支援のあり方をめざして～

伊勢市立港中学校 中 辻 浩 行

小春日和の11月28日、七里御浜の海岸線を車窓から眺めつつ、第37回三重県公立小中学校教頭会研究大会が開催される御浜町に到着しました。朝早くから、町の各地点に立ち、誘導していただいたスタッフの皆さん方をはじめ、温かい歓迎に大変うれしく思いました。

本分科会では、上記の主題で、伊賀市立柘植小学校の増岡教頭先生から提言がありました。伊賀市教頭会の研究部を中心として、支援を必要とする子どもたちへの取組の実態から見えてきた数々の課題や、校種の違いによる課題や現場の教職員の思いや悩みを浮き彫りにしたアンケート結果からの報告がありました。小中学校の枠を超えて、各校の取組の状況を交流していく一方で、児童相談所、福祉相談調整課などの専門機関との意見交換の場を持ち、連携のあり方について、研修を深めていく取組が紹介されました。それらの課題に対して、①校内支援体制に関わって ②外部機関との連携に関わって

③支援の充実に向けた環境整備に関わっての3点を、「討議の柱」として、班に分かれて協議をしました。

各班でのまとめの報告では、教頭としてミドルリーダーの育成にもっと力を入れるべきであ

ること、早期対応はもちろんのこと、早期共有も大事であること、外部機関に相談するだけでなく、活用の仕方を明確に持つことが連携であることなどが解決策として報告されました。

最後に、紀宝町立井田小学校の吉川佳男校長先生から、各機関との連携は、なかなか難しいが、「できる、できない」をしっかりと知ることが大事である。学校は学校で、できることがあり、地道に実践していけば、すぐには効果が出ないかもしれないが、児童・生徒の自己肯定感を高める事ができる。

組織的な体制を作ることも大事ではあるが、管理職の方向性が一番であること。子どもの思いを受け止めることはできるが、受け入れなくてもよい。毅然とした対応をするように教職員



に言葉がけをする。しかしそれは、大きな声で児童・生徒を怒ったり、高圧的な態度で指導することではない。

人材育成は、管理職が率先して、教職員に研修に参加するように働きかける。還流報告をすることにより、他の教職員も得るものはあるし、

まとめることによって、伝え方の勉強にもなる。等々の助言をいただきました。

多忙な日々の生活の中で、同じような悩みや不安を持つ各地区の教頭先生方との出会いにより、元気と勇気をもらうことができた1日でした。

■第3－①分科会

「安心・安全な学校づくりをめざして」に参加して

四日市市立南中学校 藤谷直行

到着した朝の御浜町の海はとても穏やかで、あと2日で12月になろうかという日とは思えない小春日和でした。御浜町の素晴らしい天気と景色に感動するとともに、運営の方々の温かい歓迎と準備に感謝し、教頭会研修会がスタートしました。

20年ほど前に四日市市から熊野市まで自動車を運転してきたときは、三重県はなんて長いのかと思いましたが、道路が整備されたおかげで山崎先生にらせていただいた車は四日市市から2時間半あまりで到着し、近くなったと驚きました。次の機会には、湯の峰温泉にもぜひ行ってみたいと思います。

第3－①分科会では、四日市市立浜田小学校の福島孝直先生から「安心・安全な学校づくりをめざして～ヒヤリハット事例集の作成を通して～」と題して、提言がありました。1つの重大な事故の裏には29の軽微な事故があり、さらにその裏には300の異常「ヒヤリとしたりハットしたりするような状態」があるという「ハインリッヒの法則」に基づき、学校におけるヒヤリハット事例を収集・分析し、危機回避や危険予測、危機管理意識の向上をはかるというものです。重大な事故やトラブルになる前に、ヒヤリハット事例から事前に事故やトラブルを回避することを、浜田小をはじめとする四日市市の第3課題研究推進委員会の所属校で3年間行った取組を発表していただきました。

各校で起こった「ヒヤリハット事例」を四日市市のサーバー上に用意したシートに入力して事例を収集したとのことで、分科会でいただいた事例集は、どの学校でも実際に起こっていることや起こりうる事で、今回の提言は自分の学校や職場環境を見直すことができる、非常に有効なものでした。収集された110の事例のうち児童の怪我にかかわるものが35あるということで、これを防ぐことは安心・安全な学校づくりに直結するものです。また、教職員ひとりひとりの意識改革につなげられ、特にこれから急増する若手教員など経験の浅い教職員の危機管理意識を高めるのに有効であると感じました。

グループ討議では、各校の取組や現状を出し合いながら交流をしました。未然防止には教職員の連携が不可欠であり、各校での事例を挙げながら多忙な中でいかに情報を共有していくのか討議しました。また、教職員の危機管理意識



をいかに高めるのが話題となり、連携・報告・声かけが大事であると改めて感じました。安全な環境づくりを進めるにあたっては、教職員の片づけや物品管理をきちんと行わせることが必要ということで、監査や閉校、改修などをきっかけに管理や整頓を進めたという話を紹介してもらいました。司会の山田喜久先生によるスムーズな進行のおかげでグループ討議の時間も十分とっていただいたのですが、具体的な事例をもとにした提言でしたので、それぞれが気になることをあげていくと時間が足りないという状況でした。各グループからの発表のあと、県教育委員会総務課 学校防災・危機管理班 班長の

大辻勝己さんからご助言をいただきました。最後に運営委員の山内日先生よりご挨拶があり、分科会は終了を迎えました。



■第3—②分科会

教育環境整備に関する課題に参加して

伊賀市立府中小学校 辻 喜 嗣

本分科会は、「地域とともにある学校づくりの推進に係る 教頭の役割を探る」の主題のもと、『鈴鹿型コミュニティスクール』の実践をもとに、各学校での地域と学校との関係作りについて話し合われた。

提言は、鈴鹿市立天栄中学校の佐藤麗教頭で、教頭としてコミュニティスクールにどのように関わっているかを中心とした内容について、発表された。鈴鹿市では、鈴鹿型コミュニティスクールという形で40校すべての学校で取り組まれている。四日市市でも市オリジナル版のコミュニティスクールが実践されるなど、コミュニティスクールの取組は広がりを見せていて、今回の提言の中でも、特色のある学校づくりの推進や不審者情報の共有等による安全で安心なまちづくりの推進、小中学校間における交流の推進などでの成果があげられた。

提言のあった天栄中学校区には先ごろ、文部科学省の指定研究で、研究発表を行った合川小学校も含まれる。私の勤務校からも校長が発表会に参加し、外国語活動の取組などに感銘を受

けてきたが、このように校区に先進的に研究を進める学校があれば、他の学校の活動にもよい影響がうまれている。天栄中学校では合川小学校と協働し、他の小学校を含む校区内4校の授業に参加するなど、全体のレベルアップにつながっているようだ。この小中連携の調整役も教頭の役割であった。

事例提案のあと、グループに分かれての討議を行ったが、どのグループでも、地域との関係づくりや保・幼・小・中・高との連携など学校の窓口になる教頭の重要性があげられ、それにまつわる苦労話がいろいろなグループで交わされていた。やはり、同じ立場の仲間であるので、相互理解も進んだ。私は、新任教頭なので、聞くことすべてに共感し、周りの参加者の話に、大きく何度もうなずかされるとともに、皆さんの話から元気をいただくことができた。

最後に、「学校の敷居が高い」との話題について、助言者から「地域には地域にあった教育がなされる必要があり、地域の中でキーマンを探す必要がある。その仕事は、地域のこと、学

校のことを一番知っている教頭の仕事である。目線を低くして、必要のある人に学校に来てもらう手立てを考えなければならない。待っていても、何も変わらない。」との意見をもらった。地域には地域の考え方や思いがあり、学校には学校の都合がある。それがいつも合致しているとは、言いがたい。また、偏った見方により学校が非難されることもあるだろう。さらに、学校では抱えきれない無理難題を突きつけられることもあるかもしれない。しかし、原点に立ち返って、学校の使命が子どもの教育であるということからブレなければ、学校に関わるすべての人々が同じ方向に向かって歩めるようになるだろう。そして、子どもの教育に導くベクトルをあわせるためのさまざまな情報を発信し続けるのが私たち教頭であることを、分科会の報告



とさせていただく。

御浜町は南国ですが、当日は結構寒い日でありました。道路や駐車場において、誘導していただいたり受付や会場設営にご苦労いただいたりした地元のみなさん。本当にありがとうございました。

■第4－①分科会

御浜の地で（コミュニティ・スクール実践校の取組から）

四日市市立三重小学校 諸 戸 美 香

「子どもの学びをより確かなものにするために」というテーマで、コミュニティ・スクールの実践報告から始まった。本校も四日市版のコミュニティ・スクール（以下CS）の指定を平成25年度に受けて3年目を迎える（四日市市内小学校38校・中学校22校中、現在は20校が指定を受けている）こともあり、とても興味深く聴かせていただいた。

提案していただいたところと一番大きな違いを感じたのは、四日市市は学校単位でCSの指定を受けているが、提案地域は中学校区単位でCSの指定を受けているところである。四日市市は、それぞれの学校で「地域とともに作る学校」をめざしてCSを行っており、中学校区でのつながりや、小1プロブレム・中1ギャップの問題解消に向けては「学びの一体化」として別の取組として行っている。それを一つの取組として行うことができることを知ることが

できた。そして、中学校区のCSとして共通の「めざす地元から愛される子ども」という部分も心に残った。これまで「地域を愛する子ども」というところは意識して取り組んできていたが、「地域から愛される子ども」というのは、自分自身意識できていなかったからである。本校の中学校区では半分の学校がCSの指定を受けているが、今後指定が広がっていくにあたっては中学校区としての取組も考えていきたいと思った。

また、「学校支援ボランティア」の取組も、本校ではCSとは別のものとして行っているが子どもの学びを支えるという立場から、CSと共に考えることもできることを知った。

「CS地域コーディネーター」の存在が話題になっていたが、地域のことも学校のこともよくわかってくださっている方にいていただけることが必要になる。本校でもその方の存在がCSの運営に大きく関わっている。

このように、自分自身は自校と比較しながら積極的に聴くことができたが、グループ協議のときの自分のグループでも他の参加者は「CS指定ではない」学校ばかりで、あまり身近なこととしてはとらえられていないようだった。市によってCSに対する動きが違うこともわかったことと、そこに一石を投じることができたという点で情報交換することは意味があったが、積極的に話が進むという感じにはならなかったのが少し残念ではあった。

一つのことを新しく始めると、打ち合わせ等で会議や仕事が増えるように感じる部分も否めない。

しかし、「地域とともにつくる学校」は、CSの指定に関わらずこれまでも大切にされてきた

ところであるので、これまでに行ってきたことをまずは進め、その中で自分たち自身が「地域とともに学ぶ・つながる」ということをより意識していくことを再確認できたよい時間であった。そう感じながら、きれいな海と暖かな日差しいっぱい御浜の地を後にした。



【本校CS委員さんへの取組報告】



【本校CS委員さんによる授業参観風景】



■第4—②分科会

「組織・運営に関する課題」に参加して

志摩市立越賀小学校 西山 喜美子

第4—②分科会「組織・運営に関する課題」では、尾鷲市立賀田小学校の東 真人教頭先生が、「教職員の持ち味を生かした学校経営」という主題で提言をしてくださいました。

賀田小学校も、本校と同じく複式学級が3個の小規模校です。そのため、職員数も少なく、限られた人数で学校を運営していかなければならないのが大きな課題であるとお話でした。また、尾鷲市としても、職員構成に均衡がとれ

ていないことが、学校全体の教育力の低下を招くのではないかと危惧されており、いかに教職員を育成し組織力を高めるかについて、市教頭会でも追求されているということでした。

しかし、提言を聞かせていただき、やっと地元以外の地域で小規模校が故の悩みを抱えておられる先生方に出会えることができたと思い、逆に嬉しくなるとともに、学校ならではの課題に向き合い組織として様々な工夫をされている

学校経営に、大きく関心を持ちながら参加させていただきました。

中でも、職員一人ひとりが持ち味を発揮して行う「全校学習」。掃除終了から5限目開始までの5分間に全校児童が1つの教室に集まって行う学習時間です。曜日毎にメニューも違い、内容毎に一人の教員が担当されているそうです。また、始業前には全教員も外に出て、体力づくりの取組もされているとのことでした。時間を惜しまず、先生方が一致団結して子どもたちと向き合われていると感じました。「校区探検」も工夫されていました。学校再編により5つの校区の児童が集まっている学校だそうですが、ふだん遊びに行く等の交流が少ないこともあり、学校所在地以外の校区を訪ね、地域の方々と触れ合う取組をされていました。淋しく思われていた地域の皆さんも、子どもたちの温かい気持ちが込められた歌声やお花のプレゼントに笑顔をいっぱい見せてくださったことと思います。

新任教頭で経験のない少人数の学校勤務の自分も、これまで、学校ならではの強みを生かした取組としてどんなことができるのだろうか・・・と考えてきました。今回の分科会に参加してその糸口がつかめた気がします。管理職の想いの

発信や情報共有、日常からのつながりを根幹に、「全員で取り組む」ことを当たり前だと感じてしまうような職場づくり。少人数だからこそできそうな教育活動の模索・・・。「人となりをつかむためには、人に興味をもつこと」というお言葉も大切にしたいと思いました。

本校も、学校再編に伴い、来年度は最終年度となります。児童も本年度の半数になってしまい、学校運営には非常に厳しく難しい児童数であり職員数です。しかし、子どもたちや保護者の皆さんも、地元の学校に最後までいてよかったと思っていただけるような1年になるよう、全職員が力を合わせて進んでいきたいと思っています。

最後に、本研究大会にご尽力いただきました紀南公立小中学校教頭会の皆様、ありがとうございました。縁あって家族が2年間熊野市でお世話になり、御浜町に住まわせていただきました。久しぶりの紀州を懐かしく楽しみに伺いました。当日の七里御浜は、どの場所から最も景色。美しく雄大でした。もちろん、美味しいみかんもたくさん手にして帰らせていただきました。

■第5－①分科会

自然と光あふれる御浜町にて

桑名市立大山田南小学校 加 生 好 美

第5－①分科会では、「教職員の専門性に関する課題」に基づき、「若手教員の指導力の向上について」話し合われた。話し合いに先立ち、川越町立川越北小学校の出口芳樹教頭先生から、三重郡での取組が提案された。この10年間の三重郡の小・中学校の教職員の年齢構成の変化に表れた、若手教員とベテラン教員の二極化傾向という現状を踏まえ、若手が育成される組織作りに、教頭としてどのように関わっていったかが報告された。この実践のもとになっているの

は、昨年度7～8月に郡内の若手教員を対象として、小・中別に実施されたアンケート調査である。アンケートは、様々な指導別に、「困った点・悩んでいる点」「解決のために手立て」について問うている。その分析結果から、教頭として果たすべき役割を整理し、教頭会でリーダーシップをとりながら連携して実践を進めたり、各校の取組を交流しより有効な手立てを議論していた。

若年層の教員の声を傾聴する、悩み・困り感

の実態から出発するという取組に学ぶべきものがあった。特に、学級指導について「人とのつながりを持つこと、持たせることに困難を感じているのは、若手に限らずどの世代にも傾向としてあること」、生徒指導において「体験・ケースを通して身に付けていくことが大切であること」は、私は兼ねてから感じているところであり、提案された実践例に教頭としてできることを研修することができた。

グループ討議では、どのグループでも学校規模や年齢構成が様々で、その現状や取組の成果・課題・教頭の役割についての話し合いは有意義であった。各グループの話題の交流では、「授業実践こそ基本、その技術と指導力をベテランから若手に伝えられる取組のマネジメントが大事」、「ミドルリーダーの育成が組織力につながる」、「背中を押したり、気づかないことを指摘したり、指導の結果を確かめたりする声かけをしている」などの内容が印象に残った。課題の感じられる教員は若手に限っておらず、教員一人ひとりの育成に努めたいという声もあった。私たち教頭は校長のリーダーシップの下、情報をより多く持って、それぞれの職員が持つ力を発揮できるよう考えた実践をしていきたいもの

である。

助言者の古市卓司先生（県教委 基本研修班）からは、「初任・6年次・11年次で行っている授業実践研修を各校にも取り入れるとともに、研修経験者を活用したい。異年齢の少人数班での学校授業改善をスクールリーダーに任せてやってみる。学校を離れた話題、趣味の交流や活動によって、雰囲気をよくする。」などのお話があった。

私にとっては、「それぞれの教職員とのコミュニケーション・実態の情報収集がとても重要であるということ」「御浜町の空と海の美しさ」が心に焼きついた研修会となった。



第5－①分科会の様子

■第5－②分科会

「教職員の専門性に関する課題」に参加して

鳥羽市立長岡中学校 田 中 次 尚

11月最後の土曜日、暖冬で紅葉も遅れているというものの、さすがに雪の便りが全国各地から聞こえてくる季節となりました。去年この大会を鳥羽市で開催し、さまざまな人たちの協力のもと終わることができたことを思い出しながら、一年の早さを感じつつ御浜町へ向かいました。伊勢自動車道が尾鷲まで開通したことやその先も道路が整備され、東紀州へのアクセスが格段に便利になったことは聞いていましたが、実際にはなかなか南へ向かう機会がないのが事

実です。新しい道ができてから大内山より先に向かうことは初めてでした。きれいな山々の景色と、数え切れないほどのトンネル、そして、それをつなぐ大小さまざまな橋の連続に自然の美しさと技術の凄さを感じながら、それでも2時間少々で会場に到着することができました。

午前中に聴かせていただいた、里創人熊野倶楽部観光コンシェルジュ 三石 学さんの『心をつなぐ道・救いの道～』は熊野古道に関わる歴史や文化を写真や映像で紹介・説明していた

だき、私にとって大変興味深く聞かせていただけることのできる素敵なお話でした。

さて、午後からの分科会は、主題「小中連携における教頭の役割」～それぞれの地域性を活かしながら～のもと、桑名市立明生中学校水谷先生からの提言を受け、

- ・小中連携について、負担を感じる職員がいる現状について・・・

- ・複数の中学校に進学する小学校との小中連携を円滑にすすめるために・・・

の二つの柱立てのもと、グループでの話し合いが持たれました。まず、一つ目の小中連携については、それぞれの学校が置かれている地域や規模など条件の違いは多々あるものの、連携の重要性はどここの学校でも強く感じている様子が語られました。その中で、「連携のためには組織作りが必要であるが、その組織がしっかりと動けば動くほど実は職員のなかに負担感が出てくる。」「何を連携していくのかをしっかりと考えて、それぞれの学校の独自性も重要である。」などの意見が出されました。また、文章には書きにくいのですが、小と中の先生それぞれの考え方の違いに関わるような、「本音」の部分の

意見も出されるなど、大変活発に話し合いが行われました。

一方で、二つ目の柱立てについて、旧桑名郡の小学校では進学する中学校が小学校ごとに明確な校区分けがないようで、他の地区ではあまりないような小中連携の大変さがあるようでした。しかしながら、自分たちのグループではそのような学校はなく、少しイメージがわきにくいようで、このことについては、あまり話し合いや議論が行われることはありませんでした。いつもこの会に参加すると感じるのですが、同じ県内の学校でも、都市部・山間部・農村部・漁村部などの地域性や学校規模は大きく違い、それぞれの良さや苦勞を感じることができます。自分たちの仲間が、県内各地で子どもたちのために頑張っているのを改めて感じることができます。そして、たくさんの力をもらうことができました。

最後になりましたがこの大会を開催されるにあたり、紀南の教頭先生がた大変ご苦勞様でした。

お世話になりました。ありがとうございました。



■第6－①分科会

「中学校区「保・幼・小・中」の連携における教頭の役割について」に参加して

津市立一身田小学校 河北大満

11月28日（土）御浜町中央公民館、御浜町立阿田和中学校にて、第37回三重県公立小中学校教頭会研究大会紀南大会が開催されました。当

日は、お天気にも恵まれ、紀南までの道路事情もよくなったため、山間を走る高速道路を快適に走りながら、随所に見える紅葉を楽しみなが



ら約2時間のドライブののち、目的地に到着しました。

分科会では、津市立白山中学校が、20年以上継続してきている人権教育の取組について提案されました。白山中学校では、保幼小中交流会・全員研修会・保幼小交流会・小中連携見学会・各学年部会・専門部会・特別部会等に分かれ、それぞれの視点で課題を明らかにし、取組を進めてきたとの報告でした。昨年度は、中学校区人権教育カリキュラムを発達段階に応じた形で作成し、本年度実施をしているとのこと。そして、見えてきた課題は、「学力向上の取組」と「生活リズムの改善」であったようです。学調や日常の学習状況について分析したり、生活リズム・家庭学習等調査結果をもとに、分析協議を行っているという大変興味深い報告でした。

休憩の後、分科会後半では、提案を受けてグループ討議を行いました。

私のグループでは、主に、小中一貫教育における人権教育の推進について話し合いました。桑名市立多度中学校の小中一貫教育の取組では、部会分けが特徴的で、研修部会・生活指導部会・音楽部会・作品展示部会・人権教育部会・養護部会等に分かれ、それぞれの学校が分散参加し

ているそうです。中学校区でノーゲームデー・ノーゲームウィークを設定して、学力向上に向けて取り組んだり、生活部会による体験学習を取り入れているとの報告でした。

また、伊勢市立上野小学校では、児童数70名程度の小学校が、そのまま中学校に入学する一校一中の地域であり、幼・保時代から中学校卒業まで同じ子どもたちの関係が続くという環境の中で、人間関係が固定してしまいそれをどう解消していくかが課題だと語られました。

伊賀市立崇広中学校区では、昔から地域と連携して人権教育を推進してきた学校区であり、校区人権教育推進協議会を中心に取り組んでいるそうです。特に、小3と小6のグループに分かれ協議を重ねていて、小3グループでは、地域学習で市民館との出会いをどのように進めるか、また小6グループでは、部落問題学習をどのように進めるかについて検討協議を重ねているとの報告でした。

協議で実感したことは、教頭の役割とは、地域と連携したり、学校の取組を他校と連携して進めたりするなど、パイプ役になることが多く、まさに、要としての役割だといえることであった。



■第6－②分科会

「教職員の育成・組織の活性化を図るために」

南伊勢町立南島中学校 宮本典彦

3年ぶりに紀南の地へ公務で行くことになっ

た。参加させていただいた6－②分科会は

『『新たな人事評価制度の導入』を活かした取組を通して』をサブテーマに、まず四日市市の羽津中学校の小林正人教頭から下記のような提言がなされた。

今年度、県が教職員の能力・意欲の向上及び組織力の向上を目指して「新たな人事評価制度」を導入したことについて、四日市では従来からある「四日市市教師力サポートブック」をもとにした自己研鑽シート（自己評価シート）を用いた取組をすすめている。これを用いることで人事評価制度のなかにある「職務遂行」「能力」「協力協働」「意欲」を意識し、具体的な自己目標設定ができ、教育活動を進めていくことができる。今後進めていくことになる、対話や評価の結果を生かして個人の能力や組織の活性化を図る活動については進行中のところで、教頭として今後のよりよい取組となるよう模索していくということであった。

その後のグループ別討議の中からは、人事評価制度については校長が中心になって進めているところが多く、教頭としてなかなか関わっていないことがみえてきた。また、対話をすすめながら評価をしていく上で根拠となるものが重要になってくるが、そこで四日市市の自己研鑽シート（自己評価シート）は有効に活用できるという意見が出されていた。

また、教職員の育成について、意欲向上を図るためには教職員の良い場面をとらえて褒める等、普段から管理職に見てもらっている（見られているのではなく）という気持ちを持たせる言葉かけなどが大切であるといったことが出された。さらに、若手の教員を育てていくためにはミドルリーダーの育成も重要だが、それを担うべき40歳代の教員が少ないので、もう少し上のベテラン教員が頑張ってくれている今のうちに若手教員と組ませて校務の中心となって進めていくようにして、自信を持たせる取組をすすめていかなければならない、といったことが出された。

四日市市の自己研鑽シート（自己評価シート）については教師力サポートブックも含めて、教

員がそれぞれの経験年数によって目標となるものが設定されており、個々に成長していくための指針が示されているところが大変参考になった。

助言者の尾鷲中学校、五味正樹校長からはこの人事評価制度の利点として

① 面談がコミュニケーションの機会として有効である。

② 教職員一人ひとりの目標が明確に設定できる。

③ 評価を本人が知ることができる、といったことが挙げられた。また、これからは評価が直接給与に反映されることを考えていくと「説明」も重要になってくる。そのためにも授業を見ていくことは大切で、その中から個々の視点もみえてくる。様々な場面で教育活動に関わって相談・対話を重視していくようにしてほしい。さらに、管理職の立場からは見えてこない、他の面からのその人の姿をとらえておくためにも、他の教職員や保護者からの声にも耳を傾けていく必要がある。「自分はこんなに頑張っているのに…」という思いが意欲の低下につながっていかないかが懸念される場所である。そういったこともふまえて校長・教頭がコミュニケーションをとりながら目標設定の段階から教職員一人ひとりに関わってほしいということをアドバイスいただいた。

大会終了後は、渋滞を避けるために回り道を指示していただいたり、寒い中こんなところで、という交差点でずっと立っていただいて道案内をして下さったりと、紀南教頭会の皆さんのあったかい配慮に感謝しながら帰途につくことができた大会だった。



初日の出 雑煮 マクドナルド

津市立久居中学校 伊 藤 利 治

大学を卒業してから今日まで、毎年欠かさず続けていることがあります。それは、野球部の友人たちと、大学の隣の海岸に初日の出を見に行っていることです。なぜ始めたのか、はっきりと覚えていませんが、日の出が見えない雪のような日も海岸に集まり、どういうわけか30年以上続いています。なぜ日の出が見えない日も海岸に集まるのかというと、砂浜で雑煮を作ることも行事の1つになっているからです。出身地の違いにより、雑煮は味噌仕立てにするか、すまし汁仕立てにするかで揉めることもありましたが、地元の意見が優勢になり、ある年からは味噌仕立てばかりになりました。鍋を持ってくる人、味噌を持ってくる人、野菜を持ってくる人、鶏肉を持ってくる人、餅は全員が持ってくるというように、いつ頃から役割分担も決まりました。雑煮ができあがる頃には、薄暗かった空もすっかりと明るくなり、海岸にたくさんいた人たちもいつの間にかいなくなっています。元日の寒風の中、友人たちと食べる温かい雑煮はとても美味しいです。

雑煮を食べて終わりかというところではありません。野球部の友人たちが集まると、どうしても野球がしたくなります。硬球や軟球を使い、グローブを用意して本格的にするのはたいへんなので、素手で守備ができるテニスボールでします。バットは使いますが、右打ちの人は左で、左打ちの人は右で打つのをルールにしています。まさに遊びの野球ですが、これがけっこう楽しくていつも盛り上がります。ホームランを打つと、正月早々気持ちがいいものです。負けチームが勝ちチームに



コーヒーをご馳走することにしており、ゲームが終わると元日から開いている近くのマクドナルドに向かいます。

マクドナルドに入り、新年会の日時と場所を相談した後は、昔話と近況話に花が咲きます。就職してすぐの頃は仕事や給料の話、やがて結婚や子どもの話になり、最近は腰痛や血圧など体の話も多くなってきました。大学の時の思い出話は何度しても楽しいものです。年が進むにつれて参加するメンバーも変わっていきました。職場の同僚を連れてきたり、彼女を連れてきたり、やがて彼女が奥さんになって参加したり、子どもを連れてきたり。子どもが小さい頃は一緒に野球をさせるのはたいへんでしたが、中学の頃にはメンバー1の強打者になっていました。

多いときは10人以上が集まりましたが、最近は最初から参加している5人ぐらいになりました。雑煮を食べた後、野球をする元気はさすがになくなり、マクドナルドに直行しています。若い頃は、県外からも来る友人のことを考えて休むわけにはいかないと、眠たい目をこすりながら参加していましたが、年齢のせい早起きは苦にならなくなりました。このように元日の午前中は、友人との時間を大切にして過ごしています。昔からの友人と一緒に初日を拝み、雑煮を食べ、話をすることで、癒され、勇気をもらい、また1年頑張ろうという気持ちになります。いつまでも、こんな友人がいることに感謝をしています。平成27年もあわずか、年が明けたら初日の出、雑煮、マクドナルドに、また元気に行ってくださいと思います。



郡市だより

土曜授業について

松阪市公立小中学校教頭会会長 前 嶌 敏 文

松阪市では、今年度から第3土曜日を原則に計10日の土曜授業が始まりました。市教育委員会の方針には、土曜日のメリットを生かし、地域住民等外部人材の支援・協力を得て実施する授業や校外学習、授業参観、また、学力や体力の向上を図るための学習活動を実施するとあります。

ただ、今年度は市内全般を見渡しても、地域連携型や地域交流型の授業を組むというよりは、思った以上に通常授業を組むパターンが多い様に見受けられます。おそらく平成14年度から始まった完全学校週5日制から久方ぶりの土曜授業であるため、土曜授業が実際にどのようなものなのかを見極めることで、今後の方向性や課題を見いだす形をとったものと推測します。

今年度、教頭である私からみえた課題が二つあ

ります。一つは補欠授業です。担任が他校の保護者である場合があるので、土曜授業に学校行事や親子行事が組まれるとそちらに参加をします。それが時には3～4学級に及び、補欠が追いつかず土曜授業の何時間かを自習で過ごす学級が生じてしまうことです。もう一つは、土曜授業の振替の取得です。振替の基本は同一週での取得ですが、忙しさから事後最大16週のうちにとることになります。そうすると長期休業日に掛かりとりやすくなりますが、長期休業中といっても会議、出張やクラブ活動でなかなか振替がとれない実態があります。過重労働対策は管理職にとって大きな課題ですから、きちんと向き合いながら土曜授業を見ていきたいと思います。



「保護者の協力を得て行った校区ウォークラリー」